

Title	植民地帝国日本における主体化と動員 : 名乗りをめぐる陣地戦についての歴史研究
Author(s)	廣岡, 浄進
Citation	大阪大学, 2012, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/59390
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	ひろ おか きよ のぶ 廣 岡 浄 進
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学位記番号	第 2 5 3 2 1 号
学位授与年月日	平成 24 年 3 月 22 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科文化形態論専攻
学位論文名	植民地帝国日本における主体化と動員 — 名乗りをめぐる陣地戦についての歴史研究 —
論文審査委員	(主査) 教授 富山 一郎 (副査) 教授 杉原 達 教授 川村 邦光 京大大学教授 水野 直樹

論 文 内 容 の 要 旨

廣岡浄進氏提出の本論文は、序章と終章を含め、全八章の大作である。全体として植民地帝国日本における在満朝鮮人と「内地」における被差別部落民を扱っているが、構成は二つに分かれ、第一部「植民地帝国と『臣民』」、第二部「総力戦体制と皇民化」の二部構成になっている。第一部においては、民族独立を目指した民族運動と、革命を目指した部落解放運動（全水ボル派）がともに体制内化していく 1920 年代から 1930 年代のプロセスを扱っている。第二部では、第一部の体制内化を前提として、そこに重なるように登場する総力戦体制を検討している。以下、章ごとの要約を述べる。

第一章では、在間島総領事館が主導して組織しつつも民族運動を包含していた朝鮮人民会が「帝国臣民」として生活の救済を請願していく過程に、統合と抵抗の両側面のせめぎ合いを見出そうとしている。第二章では、1930 年代の全国水平社における部落委員会活動の中心人物であった朝田善之助の京都での実践活動を取りあげ、左翼運動の壊滅のなかで、運動の焦点が生活救済の要求と行政の地区整理構想に移っていくことが検討されている。第三章では、1937 年に大阪市において結成された生江町経済厚生会を取りあげ、その地域

の生活実態と生活救済要求を検討すると同時に、同時期に同じ地域に流入した朝鮮人に焦点を当て、運動における生活救済要求と朝鮮人への排外主義的な差別との連関を問題にしている。第四章では、1935 年に設置された間島省の官僚機構を官僚の出自にまで立ち入って分析し、朝鮮総督府やそこでの朝鮮人官僚との重なりを明らかにすると同時に、朝鮮人民会と協和会の重なりや連続性を問題にしている。第五章では、1941 年に発足した同和奉公会を取りあげ、被差別部落民が文字どおり総力戦体制を担い、「皇国臣民」として動員されていくプロセスを浮かび上がらすと同時に、そこに生活擁護、生活救済の文脈を見出し、依然として抵抗の文脈が維持されていたことを明らかにする。第六章では、協和会における朝鮮人会員に焦点を当てながら総力戦体制下の在満朝鮮人において登場した「皇国臣民」言説を検討し、そこに兵士としての動員とともに在満朝鮮人教育への要求が並存していることを明らかにしている。終章では、以上のような各章の具体的な検討内容を、1920 年代から総力戦体制に至る植民地帝国日本における支配と抵抗の問題として総括している。ここでは、乱暴に言えば、従来の研究では運動の評価が民族独立あるいは階級闘争との関連性が重視されていたのに対して、生活という領域をめぐる上からの組織化と下からの組織化という陣地戦の重要性が指摘されている。また既存の民族集団に階級化された植民地帝国ではなく、個人の身体にかかわる動員と生活にかかわる帝国の介入において見出される新たな帝国像が、展望されている。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、具体的な歴史分析であると同時に、日本帝国にかかわる新たな分析視角を提示しようとする挑戦的な内容を持つ。かかる視角にもとづいて、部落史研究と朝鮮近代史研究あるいは帝国史研究であつかわれていた問題を繋げようとしている。そこで提示された新たな視角は、二つある。第一は帝国における支配と抵抗にかかわる点である。これまで、戦間期における国家の社会政策的介入と中間団体の組織化という問題は、農業問題については長原豊などにより議論されていた。こうした議論では、中間団体の組織化が集合財である以上その財を求める集合行為が前提にならざるを得ず、そこに上からの組織化と下からの組織化を見出し、両者の結節点として地域社会や日常生活が設定されている。廣岡氏の本論文はこの枠組みを帝国という問題において引き受け、集合財と中間団体を、命名と名乗りの交錯するヘゲモニーの問題として焦点化しようとした。またこの名乗りにかかわるのが生活をめぐる欲望であり、したがって、なぜ帝国を欲望するのか、どのような言葉において欲望を表出するのか、そして帝国はそれをどのように集合財の要望として纏め上げるのかといった欲望をめぐる複数の問いが、上からの組織化と下からの組織化の接近戦の問題として設定されている。第二はレイシズムにかかわる点である。上記の中間団体と集合行為は、いかえればアイデンティティとその制度化の問題でもある。本論文では、これを伝統文化や民族文化の問題ではなく、労働力にかかわる身体的要素や生活実践にお

いて構成され集団性が名乗りとヘゲモニー貫徹の結節点として登場する事態としてとらえようとしている。理論的には移民や難民においてエティエンヌ・バリバルが提示した「階級のレイシズム」を検討することにより、労働力という身体をめぐる身体的要素において構成される総動員体制下の植民地帝国を、レイシズムの問題として議論しようとしている。だがこのような二つの新たな視角の提示については、国内政策としての社会政策を帝国に広げる際の理論的検討、臣民化をあつかう第一部と皇民化をあつかう第二部の差異とつながりの明確化といった課題が残されており、また歴史実証についても史料批判の更なる必要性や記述の不統一などが見受けられる。しかしながら、こうした課題を残しながらも、帝国研究としての部落史研究を提示し、帝国研究に対しても新たな視角を具体的に提示するという野心的作業は成功しており、よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。